関東・東京合同地区獣医師大会・学会　抄録

参考資料２

動物病院における動物由来感染症モニタリング事業結果

○鈴木良[1)]　岩本百合子[1)]　小林元郎[2)]　中川清志[2)]
１）東京都環境保健衛生課　２）東京都獣医師会

Ⅰ　はじめに

東京都は、都内の一般家庭で飼養されている動物における動物由来感染症の発生動向を把握するため、公益社団法人東京都獣医師会と協力し、動物由来感染症のモニタリング調査を実施した。

Ⅱ　材料および方法

１　実施期間

平成２１年９月から平成２９年３月まで

２　調査対象動物

東京都獣医師会指定動物病院３５病院（区部：２３、多摩部：１２）を受診した犬、猫

３　調査対象とした動物由来感染症（右表のとおり）

表　調査対象動物由来感染症

犬	猫
皮膚糸状菌症	皮膚糸状菌症
疥癬	疥癬
ノミ刺咬症	ノミ刺咬症
回虫症	回虫症
ジアルジア症	ジアルジア症
瓜実条虫症	瓜実条虫症
犬ブルセラ症	トキソプラズマ症

４　調査対象動物の飼養状況調査項目

品種、年齢、性別、体重、飼養形態、症状、ワクチン接種歴、ノミ駆虫の有無、同居動物の有無を調査項目とした。

Ⅲ　成績

平成２１年９月から平成２９年３月までに指定動物病院を受診した犬は５２７，８２７頭、猫は２８１，１４９頭であった。このうち、モニタリング対象の感染症と診断された頭数は、犬で１，９１０頭(０．３６％)、猫で２，９６８頭(１．０６％)であった。犬ブルセラ症、トキソプラズマ症については報告がなかった。

Ⅳ　考察

今回の調査で、調査対象感染症と診断された犬、猫のうち、ノミ刺咬症のみの感染個体を除いた犬５７３頭、猫１，０６３頭のうち、犬においては１８２頭（３１．８％)、猫においては５１１頭（４８．１％）が１歳未満であった。これらの個体は、入手時にすでに感染していると考えられた。また、飼養形態については、犬５２５頭(９１．６％)、猫８３８頭(７８.８％)が屋内または屋内外両方飼養であった。人と動物の生活環境がより密接なものとなっていることから、手洗い、飼養環境の清掃、動物の日々の健康管理、動物の入手時及び定期的な健康診断、過度な接触を避けるなどについて、引き続き飼い主に対して普及啓発していく必要がある。獣医師は、動物の治療に加えて飼い主に対して動物との接し方について助言を行うなど、その役割は重要である。今後も、本モニタリング事業を継続し、収集した情報等を獣医師や都民に情報提供することで、動物由来感染症に対する感染予防対策の一助としたい。